

あやまる第2貝塚
(大島郡笠利町須野字大道)

位置と環境

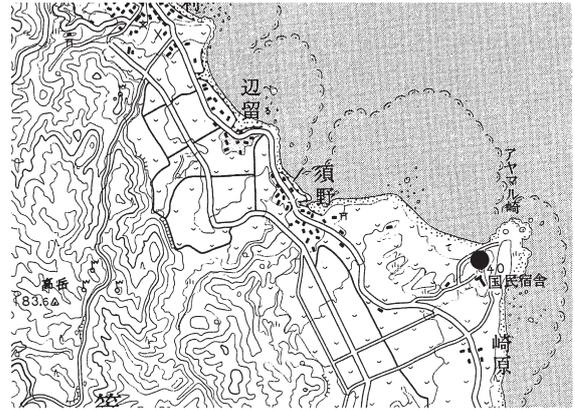
笠利半島でも東海岸は起伏の穏やかな台地状地形が形成されて、サンゴ礁がよく発達し、砂丘が多く形成されている。そのためにも眺望は広くはるかかなたに喜界島が浮かんで見える。

貝塚は独立砂丘をなしている。砂丘東側は舌状に海に突きだした岬状の岩盤がある。この岬が通称「あやまる岬」と呼ばれている。砂丘西側は小川が流れており、砂丘が切断されている。小川の更に西側は台地をなしている。砂丘南側は低湿地をなしており、ゆるやかに台地へとつながる。砂丘全体は三方台地に囲まれたような地形にあり、北東側が海に面し、発達したリーフが広がる。奄美の遺跡の立地条件を画に描いたような地形と環境である。

調査の経緯

遺跡は1971年に遺物が採集されたことに始まる。その後の調査で沖縄県立博物館の多和田真淳コレクションの中にアヤマル岬の南と北側に遺物を採集されており、南側をあやまる第1貝塚、北側をあやまる第2貝塚として記録されている。

あやまる第2貝塚は蘇鉄ジャングルとして保護され、自然散歩コースとして観光化されている。その地を遺跡としても保護する目的で1978年笠利町教育委員会によって発掘調査が行われた。



第1図 あやまる第2貝塚の位置

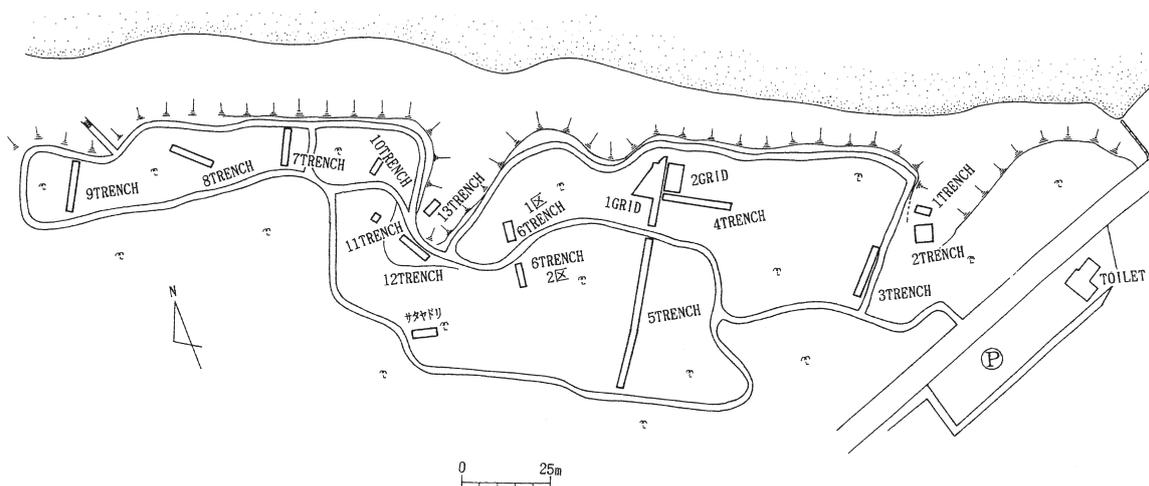
遺構と遺物

あやまる第2貝塚は砂丘に広がる遺跡範囲確認調査を主とした調査であるため、地形に合わせたトレンチ調査を行っている。その結果、遺物は縄文時代から弥生時代までの遺物が出土し、複合遺跡であることが判明した。

面縄前庭式土器や嘉徳I式土器の出土があり、縄文時代後期にはすでに砂丘上に生活が営まれていたことが判明した。砂丘はさらに海側に発達し、遺跡も移動していることが遺物の出土状況からわかってきた。

第1グリッドからは免田式土器の特徴を持つ土器が発見された。粘板岩製の磨製石鏃も出土しており、南九州弥生後期の特徴をもつ。

第2グリッドでも口縁部が外販する甕形土器が出土しており、弥生後期の時期に南九州との深いつな



第2図 トレンチ配置図

がりが明確になる。今後は在地の土器との関係が注目される。

特徴

縄文時代から弥生時代にかけての遺跡は笠利町サウチ遺跡などが知られているが、当遺跡も弥生時代の奄美を知る重要な遺物の発見になった。

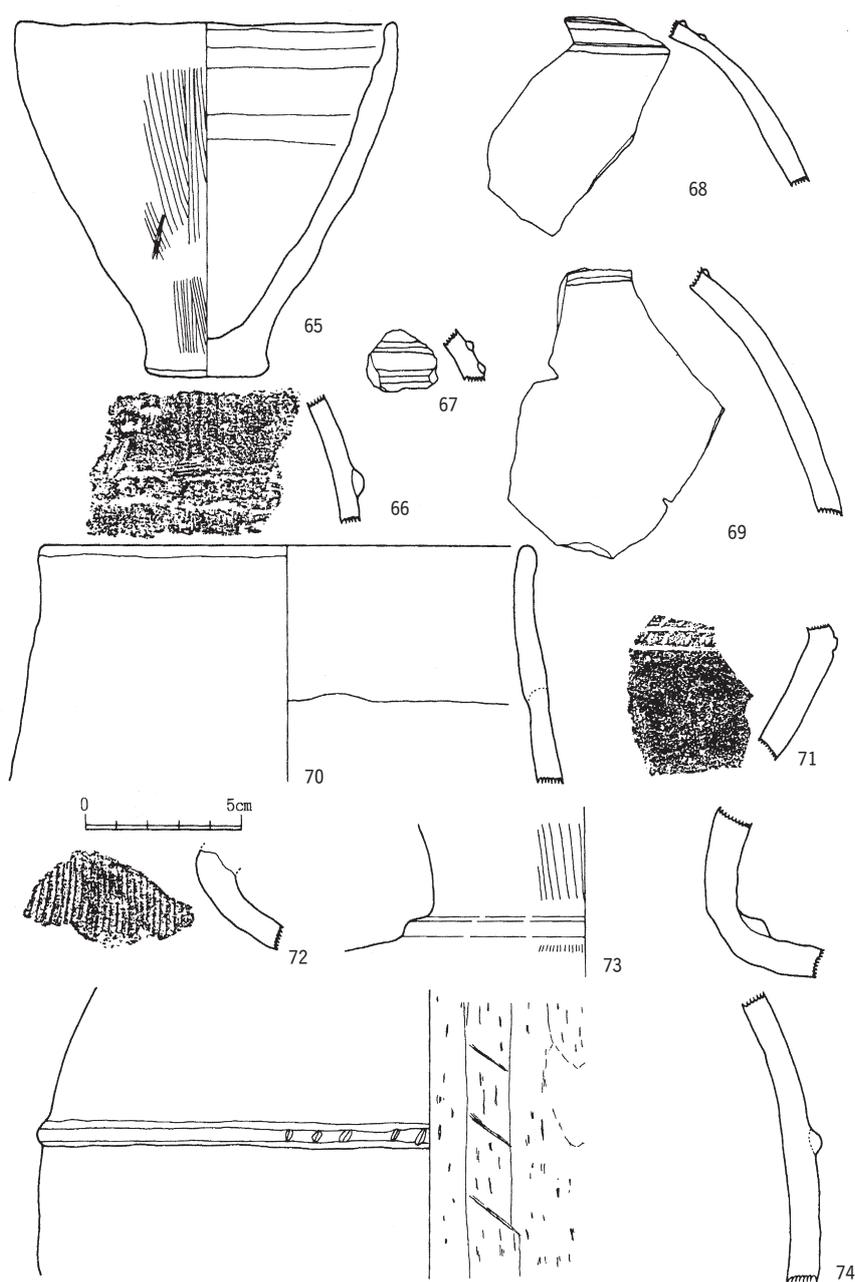
資料の所在

出土遺物は、笠利町歴史民俗資料館に保管されている。

参考文献

笠利町教育委員会1984「あやまる第2貝塚」『笠利町文化財報告』7

(中山清美)



第3図 あやまる貝塚出土土器